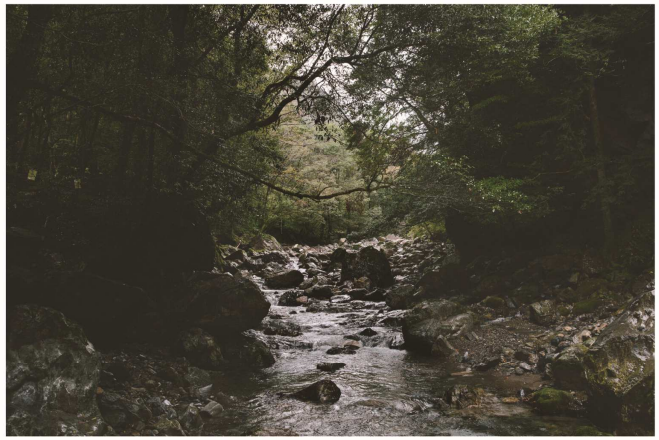
熊本

やまえ



監修
〔一社〕九州のムラ

編集・取材・文
栗山遼

デザイン
小田雄大
川村晃子

写真
行本正志

イラスト
錦戸浩一

制作協力
小野義明

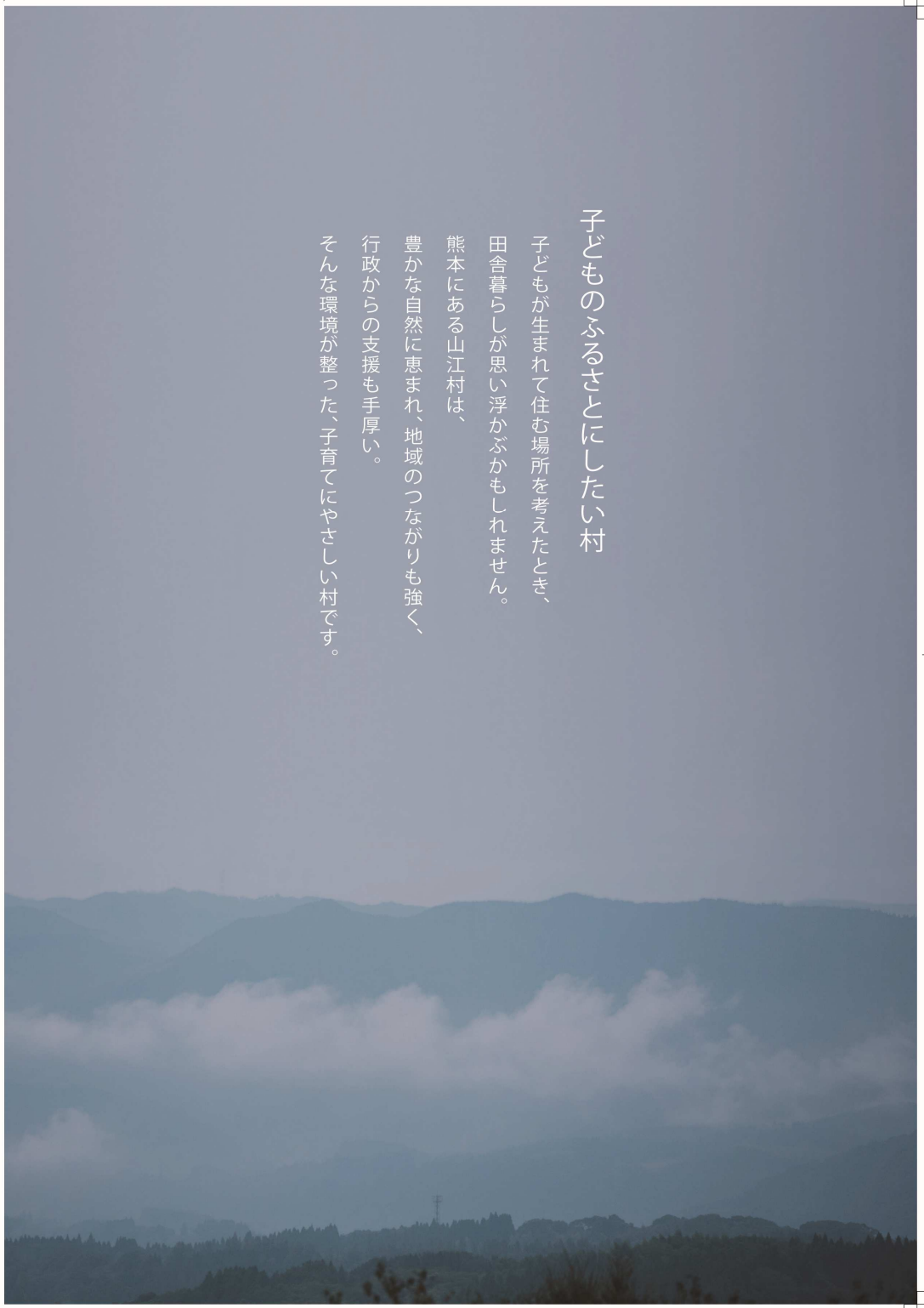
印刷・製本
ダイヤモンド秀巧社印刷（株）

2017年2月1日発行

山江村役場
〒868-8502
熊本県球磨郡山江村大字山田甲1356-1
☎ 0966-23-3111
FAX 0966-24-5669
kikakucyousei@vill.yamae.lg.jp
http://www.vill.yamae.lg.jp/yamaekurashi/

村のみなさんのインタビューをもっと読みたい方や
空き家の情報を知りたい方は、こちらを検索ください

山江村　移住　検索



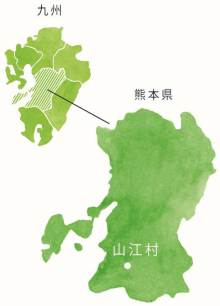
子どものふるさとにしたい村

子どもが生まれて住む場所を考えたとき、
田舎暮らしが思い浮かぶかもしれません。
熊本にある山江村は、
豊かな自然に恵まれ、地域のつながりも強く、
行政からの支援も手厚い。
そんな環境が整った、子育てにやさしい村です。

や 山江村について

どこにあるの？

山江村は九州の熊本県南部に位置する、面積121平方キロメートル、人口3600人ほどの小さな村。熊本市内からは自動車で約90分、鹿児島空港からだと約45分。オフィスやスーパーが並び、高速ICのある人吉市へも10分程度で行ける便利な立地です



特産物は？

山江村では8割近い農家が栗を栽培し、年間120トンほど出荷しています。人気の品種「利平」はピンポン玉ほどの大きさで、ツヤツヤとした質感。
また、清流の万江川には、「渓流の女王」「幻の魚」といわれるヤマメが生息しています。塩焼きにして食べると絶品です

観光資源は？

温泉施設「山江温泉ほたる」は歩行浴やマイナスイオン発生陶板浴など14種類の温泉設備を完備。地下1000メートルから噴出するナトリウム炭酸水素塩泉が日頃の疲れを癒します。無農薬野菜や特産品の栗などもこちらで販売。地域住民の憩いの場となっています

【参考資料】
「山江村役場」(山江村役場) <http://www.vill.yamae.lg.jp>
「気になる！くまもと」(熊本県広報課)より「連載「くまもと食の異物語」第378号」<http://www.kininaru-k.jp/2008/back_doc/09/0925/syoku.html>

子育て世代が語る、「山江村に移住してよかった」

宮原 亜紀子さん

山江村は子育てにやさしい村。そんな評判を聞きつけ、山江村で二人の子どもを育てている宮原さんに話を聞いてみることに。

山江村との出会い

宮原さんは、2013年に隣町の人吉市から移住しました。

「軽い気持ちで住宅展示場に遊びに行ってから、子どもができたし家を建てたいねって夫と考えるようになりました。そのときに住宅メーカーさんから提案されたのが山江村だったんです。山江村は知らない土地でしたが、住んでいた人吉市と隣接してて。便利な立地で土地も安い、理想の場所でした」と話す宮原さん。

「子育てサロン」に参加

移住後しばらくして第二子を出産。行政が主催する「子育てサロン」に参加することに。

「小さなお子さんを持ったお母さんが対象の集まりで、子育ての相談に乗ってくれたり、絵本の読み聞かせをしてくれたり。今は子どもが大きくなったので参加していませんが、当時知り合ったお母さんたちとは今も会えばお喋りする仲です。もともと山江村に知り合いがいなかったので、このような場所で顔見知りができてホッとしました」

温かな対応に感動

手続きのために行った役場では、職員の対応に感動したそう。

「役場に入ってキョロキョロしていると、いつも誰かが声をかけてくれます。夫が経営している飲食店に、全国各地へ出張している営業マンの常連さんがいて、『山江村は日本一行政の対応がいい』と話してました。やっぱりそうなんだ、と感じましたね」

小さな村の強みとは

以前宮原さんが住んでいたところは、山江村の10倍近い人口規模の街。小さな村に移ることに、不安はなかったのでしょうか。

「不安は全くなかったです。小さいコミュニティの方が、行き届いたサービスを受けられます。健診を受ける場合など、受診する人数が少なく、最近不安に感じていることを相談する時間もあります」と満足そうな宮原さんでした。

親しみやすい役場の職員さん。親身になって話を聞いてくれます

夏は万江（まえ）川で水遊び。浅瀬もあるので小さいお子さんを遊ばせることもできます

旦那さんのお店の手伝いが終わり、保育園へ娘さんをお迎えに

行政も、住民のみなさんも地域ぐるみで子育て

ママに嬉しい！行政からのサポート

山江村に住めば、手厚い行政支援がこんなにあるんです(注：2017年1月時点での支援内容となります)。生活する上で非常に助かると、お母さんたちから大好評！ 実際、このような行政の努力もあり、※2008～2012年の山江村の平均合計特殊出生率は2.00で全国24位を記録しました

SUPPORT 1

こんにちは赤ちゃん祝金

３年以上引き続き村内に居住する保護者に対し、子どもが生まれた際に出産祝い金を支給。子ども一人につき５万円となっています

SUPPORT 2

子育てサロン

乳幼児と保護者のため、週に一度開かれる交流の場。保育の専門家が子どもの遊び方を教え、子育てに関する相談にも乗ってくれます。村の住民は参加費無料

絵本の読み聞かせをしている様子

SUPPORT 3

チャイルドシート購入補助

6歳未満の乳幼児を持つ世帯主に対して、チャイルドシートの購入費用の1/2以内を補助します(１万円の上限があります)

SUPPORT 4

小・中学校給食費助成

小・中学校では給食費が要りません。さらに、給食は校内の給食室でつくられており、地元の食材を用いた地産地消にも取り組んでいます

SUPPORT 5

就学金支給

村内の小学校に就学する子どもを持つ家庭には、入学祝い金として子ども一人につき３万円が行政から支給されます

SUPPORT 6

村営学習塾

放課後や長期休業中に、学習塾の講師を村に招いて村営学習塾を開催しています。中学１～３年生が対象で、参加費は無料

SUPPORT 7

すこやか子ども医療費助成

赤ちゃんから高校生までは、医療費がかかりません。子どもの病気の早期治療を促し、健康を守るためのサポートです

SUPPORT 8

病児病後児保育事業

小学校３年生までの子どもが病気で、保護者が勤務等の都合で育児を行うことができない場合に利用することができます

地域住民が実践する、スポーツを通した子どもの育成

「わいわいクリスポやまえ」
地域住民が運営するスポーツクラブ。現在100人近い小・中学生が所属し、野球やサッカー、バドミントンなどのスポーツに励んでいます

山江村では子どもたちの体力づくりにも力を入れています。2010年に活動を開始したスポーツクラブ「わいわいクリスポやまえ」。立ち上げたのは、現在会長を務め、バドミントンの指導をしている横山浩之さんです。

きっかけは、山江村の中学校にはバドミントン部がないからと、小中学生を対象に自主的に始めたバドミントンクラブ。その際に国から、各地域でのスポーツ推進を図る「総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業」の話があり、現在の「わいわいクリスポやまえ」に発展しました。

子どもたちに指導している横山さん

横山さんの他にバドミントンを指導しているのは３名のコーチ。どうやったら子どもにうまく教えられるか、コーチに指導しているのも横山さんです。

「子どもの育成はもちろんですが、指導者を育成することが重要です。このような地域の活動は人づくりにつながります。先日、小学生の作文の中で『将来はクリスポやまえの指導者になりたい』と書かれているものがありました。10年後や20年後、その子たちが指導者になってくれると思えば、やりがいもあります」

最後に「わいわいクリスポやまえ」の今後の目標を聞いたところ、次のように答えてくれました。

「1964年の東京オリンピックで水泳競技に、山江村の方が出られていたんです。そして、クリスポやまえにもオリンピック出場を目指している子どもがいます。山江村から再び選手が生まれるよう応援したいです」

※【参考資料】
「厚生労働省」(厚生労働省)より平成20年～平成24年人口動態保健所・市区町村別統計の概況<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/other/hoken14/dl/2-3P.pdf>
合計特殊出生率……一人の女性が一生に産む子どもの数

ICT教育を導入し、全国平均を大幅に上回る学力に

画面上の図形に書き込みや回転を加えることで理解しやすくなっています

地方の子どもの可能性を狭めない学習機会を提供したいと、山江村ではICT（情報通信技術）を導入した教育に力を入れています。現在、村内の各学校に無線LANを配備し、各学級に電子黒板を一台配置。タブレット型パソコンも、小学生には一人一台、中学生には学校用と家庭学習用に一人二台与えています。

アナログとデジタルの使い分け

ICTの導入を打ち出しているものの、大切にしているのはアナログな学習方法と、デジタルな学習方法との融合です。デジタルな学習方法は、今まで不可能だった学びを実現しました。理科の実験では変化の様子をタブレットで録画して繰り返し観て考察することができ、マット運動やリレーのバトンパスなどでは撮影した自分の運動の様子を後から振り返ることができます。

一方で、アナログな学習方法は個人の学びを深めるのに必要です。電子黒板は次から次に画面が切り替わるため、情報が残りません。そこで、しっかりノートに残してほしいものは黒板にまとめて、いつでも子どもたちが確認できるようにします。

外で撮影したものを教室に持ち帰り、じっくり考察を深めることもできます

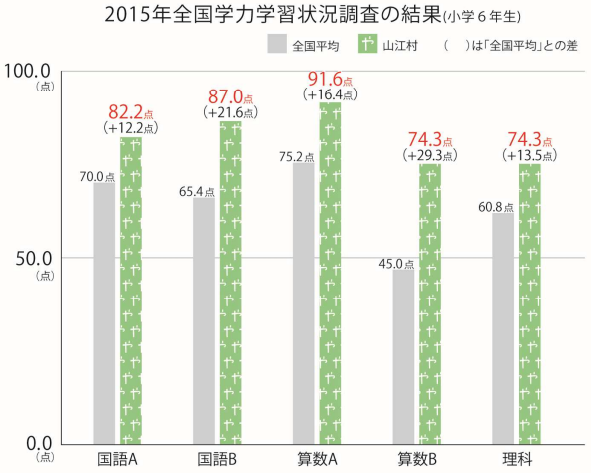
タブレットはキーボードとディスプレイを切り離すことが可能

ICT教育の導入として、最初に取り入れたのは電子黒板

参加型授業により、自分で考える力が身につく

小学校の社会科の授業では、課題に対する意見をタブレットから電子黒板に配信し、クラス全員がそれぞれ考えていることを把握できます。スピーディな情報共有により、子どもたちが自分の意見を発言する参加型授業の充実が図られています。

山江村の教育効果は数値にも表れています。グラフは2015年に全国の小学6年生を対象に行われた学力調査の結果です。このテストが子どもたちのすべての学力を表しているわけではありませんが、どの科目も全国平均を大きく上回り、知識を活用して自分で考える力が身についていると言えます。



※A問題（国語A/算数A）は主に知識に関する問題
※B問題（国語B/算数B）は主に活用に関する問題

先生、教育現場はどう変わりましたか？

村内にある小学校の一つ、山田小学校。こちらで子どもたちに指導している西口先生と古賀先生にお話を伺いました。ICTの導入による先生方の取り組みや子どもたちの反応とは

タブレットを渡したときの子どもたちの反応はどうでしたか？

西口先生：なぜそうなるのかと考えさせるものを提示すると、子どもたちも興味を示します。また学力的な成果として、機器を使って試行錯誤することで、一問一答ではなく粘り強く考える癖がついています。

西口先生

古賀先生：そうですね。タブレットをもの珍しく触りたいというだけの興味は子どもたちには長くは続かず、次第に機器を使って人に何かを伝えることに面白みを感じていくようになりました。言葉だけでは説明しにくいことも、『ここがね』と画像を示すことで友達にもうまく伝えられますよね。

デジタル機器を使いこなすのに、子どもたちの間での個人差はどのように埋めていますか？

古賀先生：今の子どもたちはスマートフォンなどの情報機器に触れる機会が多く、タブレットも器用に使いこなしている子どもが多いです。それに、直接画面に書ける機能もあり、タイピングで差が出るような授業は行わないようにしてます。

西口先生：もちろんタイピングが苦手な子どもには、個別指導でその差を支援します。

授業を見学させてもらったのですが、授業態度のよさに驚きました。

西口先生：ICTは一つの道具であって、学ぶすべての土台は学習規律になります。黒板を見てほしいときに、手元でタブレットを触っていたら教育効果がないからですね。

古賀先生

古賀先生：整った学習規律は山田小学校の伝統です。しっかりした上級生を下級生が手本にして受け継いでいます。

規律正しいのは伝統だったのですね。学校内にお邪魔した際も、子どもたちの元気な挨拶で迎えてもらえて気持ちよかったです。

西口先生：子どもたちの素直で活発なところが山田小学校の魅力です。このように人が育っているのは、村が教育に情熱を注ぎ、ハード面を整えてくださっているからだと感じています。

【参考資料】
「広報やまえ」（山江村）より「やまえの教育NOW」
「CHieru Magazine」（チエル株式会社）より「恵まれたICT環境が、アクティブ・ラーニングと協働学習を促す」

移住者インタビュー

山江村に移住し、生活が大きく変わった3人。自然に恵まれた環境や、地域の方との交流を楽しんでいるようです

INTERVIEW 01

地元住民に助けられ、スタートできた農業

小林 貞人さん

ピーマンやレタスなど年間約30品目の野菜を育てています。写真は、畑の野菜を元気にするため、微生物をふりかけている場面

大阪から山江村に移住し、農業を始めた小林さんの前職はなんとSE(システムエンジニア)。新しい環境で、仕事も心機一転しました。山江村での新規就農はどのようなものでしょうか。

移住や新規就農のきっかけは何だったのですか?

もともとIT業界で独立しようと思っていたのですが、山江村に一人で暮らすお義母さんが心配になり移住しました。SEの仕事はどうしても情報の多い都市部に集まるので山江村ではできませんが、農地が広がっているのを見て、以前から興味のあった農業を思い切って始めました。

農業の経験がない状態で、頼みにしていたことはありましたか?

農業に興味のある人を対象にした「農業人フェア」が大阪で開かれていたので相談に行ったところ、熊本には豊富な農業研修が整っていることと国から助成金が出ることを知りました。農業はリスクが大きいと聞いていましたが、それなら始められるかと。ただ、ここに移ってからも始めるのに苦労しました。急によそから来た人が農地を借りるのは、やっぱり信頼もないし難しいんですね。そんなときに近所の方から「あの人に聞いたら何とかなる」と田村さんを紹介してもらいました。田村さんが農地を所有している方に交渉してくださり、3000平方メートルほど借りることができました。

それに田村さんは、うちの野菜を僕の知らないところで営業してくださってます。先日知らない方から「小林さんやろ? 田村さんに、小林さんの野菜買ってなって言われたよ」と話しかけられました。とても感謝しています。

Profile
大阪で17年間SEとして働いた後、2016年に山江村に移住し農業を始める。今後は農産物のネット販売にも取り組み、生産、加工、販売まで一貫した6次産業を実現したいとのこと。

小さなことでも相談できる! 頼れる村の案内人

田村四郎さん

住民である田村さんは40年ほど前に今の場所に越してきた際、地域に馴染めるか不安を感じていたそう。そんな自身の経験を踏まえ、移住者の不安を解消しようと、ここ数年自主的にお世話をしています。居住先を一緒に探したり、困ったことがないか声をかけたり、自宅で開くお茶会に招いたり。そこには「移住者に早く馴染んでもらいたい」という想いがあります。

小林さん(写真右)の畑は田村さん(写真左)の自宅の裏にあり、よく顔を合わせます

INTERVIEW 02

活き活きした自然の中で暮らし、髪も黒くなった

椎葉 繁さん

以前は熊本市内に住んでいた椎葉さん。定年退職後は田舎暮らしをしたいと阿蘇や宮崎など九州各地をまわり、偶然見つけた山江村に住み始めました。長年夢見た、シニアライフを満喫しているようです。

定年後の住まいに山江村を選んだのはなぜですか?

初めて山江村を訪れたときにピンときたんです。熊本県内には他にもいい場所がありますが、こちらでは川のせせらぎが聞こえて、鳥の鳴き声が聞こえる。自然や地域に活気があるこの土地を気に入りました。

どんな毎日を送っていますか?

なんでも自分でやりたい気持ちが湧いてきて、畑で野菜や果実を育てるようになり、地域の神社の掃除もやるようになりました。若返ったんですかね、髪も前より黒くなって、目もよく見えるようになりました。これも山江村の美味しい食物や綺麗な水と空気のおかげです。

収穫した野菜を、奥さんの友子さんが料理します

Profile
熊本市内で営業マンとして勤めた後、2005年に山江村に移住。学校給食での地産地消を進める運動や介護予防の支援など、積極的に活動している。

INTERVIEW 03

憧れの二拠点生活。リフレッシュできる環境で

寺山 俊郎さん

宮崎市内で建築設計をしている寺山さんは、山江村の居住施設「ほたるの荘」を借り、月に何度か滞在しています。二拠点生活としての山江村とは。

二拠点生活は以前から考えていたのですか?

はい。市街地で暮らしているため、自然に恵まれた場所を別の拠点として持つことに憧れがありました。打ち合わせなどで宮崎市内の事務所も必要ですが、パソコンで遠隔対応できる仕事もあり、このような生活ができています。

山江村を知った経緯を教えてください。

渓流釣りをしに山江村に行ったのがきっかけです。緑が視界一面に広がっていて、川も澄んでる。こんな自然の中に住めたらと思っていたところ、「ほたるの荘」を紹介してもらえました。

仕事もはかどりますか?

夏場は、朝晩の気温がぐっと下がるのでぐっすり眠れて疲れが取れます。すぐに釣りに出かけられて気分転換もしやすいです(笑)。

ヤマメを求め、寺山さんが出かける先は万江(まえ)川です

Profile
建築家。事務所は宮崎市内にあるが、2014年から山江村をもう一つの拠点として選んだ。夏は月の半分以上、冬は月に3日ほど山江村で過ごしている。

移住者と積極的に交流し、村を元気づける地域住民

川内美智代さん

移住者を日頃から食事や催し事に誘っている川内さん。寺山さんの歓迎会も主催し、地域住民や役場の関係者など30人ほどが集まりました。「よそから人が来れば、掃除したり、花を植えたり、村の活性化につながります。新しい人を迎え入れて私たちが楽しそうに交流していたら、周りの人も何してるか気になって自然と人が集まります」と村を盛り上げています。

「特別なことをやっているのでなく、ただ楽しいから一緒に遊んでるだけ」と語る川内さん